
俺は僕で僕は

黽b

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺は僕で僕は

【Zコード】

N1475BA

【作者名】

勲b

【あらすじ】

『ナイトオブトゥエルブ』の地位につく彼女、モニカ・クルシェフスキーには弟がいた。

だが、その弟は偽りで

弟には秘密がある。

それは自身ですら知らない秘密

偽りに塗りつぶされた秘密

プロローグ（前書き）

タイトルは何時か変える予定です

途中から視点が三人称になっています

プロローグ

「構えろ」

僕がそう言うと周りにいる人全員が目の前にいる彼女に銃口を向ける。

「おいおい、私はそんなものでは死なんぞ」

「撃て」

僕が引き金を引くと同時に周りにいた人々が彼女を撃ち抜いた。

「……止める」

そう言つと周りの人は撃つのを止める。

「まだ協力者がいるはずだ、探しだせ」

『わかりました、C・C・様！』

息を呑わせて応えると全員が散らばつていった。

「くつ……」

僕は目の前で血塗れになり倒れている彼女を見下す。

C・C・さん

「流石の貴方でもマヒ弾は堪えるまつですね」

「くつ……止める」

僕はC・C・さんを無視して歩きだす。

「今のお前じや……あいつは殺せないぞ」

「そんなこと無いことですよ」

僕は振り向いて彼女に自身の瞳を見せ付ける。

「僕のギアスは最強だ」

それは今実証されたんだ。

ギアスが効かないC・C・さんを倒せた。

やつぱり、僕のギアスは

ゆつべつと歩きながら、施設から出る。

「後悔……するだ

C・C・さんの言葉に振り向くことなく歩く。

「構いませんよ

振り向かずに応える。

「ルルーシュ様とナナリー様の敵が取れるんだつたら」

自身の決意を再確認するように

「何だつてするし、後悔なんてしない」

力強く言った

「して、ビスマルクよ我に用とはなんだ」

「陛下、人払いのほうは」

「お主の言う通りにしてやつたわ」

ちょろいな。

僕は前を見る。

目の前には、あの男
ルルーシュ様とナナリー様を殺した男

神聖ブリタニア帝国第九十八代皇帝、シャルル・ジ・ブリタニア
が背を向けて立っている。

僕は隠すように後ろ手で持つて居る左手銃を強く握る。

「では、陛下に一つ言つておきたいことが」

銃口をシャルルに向ける。

殺せる。

これで、この男を

殺せる！

「死んでください」

ゆつくつと僕は引き金を引く

が

「やがらせぬ……」

「なつ……？」

急に現れた男 ビスマルクは俺から銃を奪つと床に叩きつけられた。

「して、ビスマルクよ、この曲者が？」

「はつー、私のギアス団から逃げ出した者かと」

ツー？

「じつは、口振りからしてギアスを知ってる！？」

「ギア

」

「わせぬー！」

ビスマルクは僕の背中を殴る。

「がつ

意識が一瞬遠退く。

「ルルーシュ様ナナリー様

敵を僕が

少年の意識が遠退くと、彼のギアスが解けた。

「なつー！ 子供だとー！？」

先ほど迄ビスマルクと瓜二つだった容姿はみんな子供に変わっていた。

「……ルルーシュ殿下よりも年下、もしくは同年代でしょうか」

ビスマルクは少年が口にしたルルーシュと比べるが、シャルルはどうでもよさそうに言つ。

「ビスマルクよ、その者の顔を見せろ」

ビスマルクはシャルルの言つ通りにする。

「……この者は使えそうだな」

「な……を」

興味深そうに言つシャルルに少年は力なく応える。

「シャルル・ジ・ブリタニアが刻む

「ギ……アス……！？」

「新たなる偽りの記憶を！？」

シャルルのその言葉を最後に少年は完全に意識を手放した。

それから数年後

少年の物語は新たなる始まりを迎える

プロローグ（後書き）

こんにはー勵ひでーす

ギアス連載書きたかつたんですね

ヤンデレにするかどうかは不明です。

ただ、モニカ好きの作者が頑張るだけの連載になりますが、応援してくれたら嬉しいです！！

PS連載削除ゲームを開催準備中です

詳しいことは私の活動報告を見てください

偽りの弟編 1（前書き）

はじめの会話は何となく書きたかつただけです

「 もうすぐ日本とブリタニアが戦争を始めるらしいわ 」

「 へー 」

「 もう、騎士にならうと志す者が本国の戦争に興味を無くしてたらダメでしょ 」

「 “俺”は姉さんを守る騎士になりたいんだ、ブリタニアには興味は無い 」

「 …… もう、調子いい」と囁いて

「 …… 日本 」

「 日本がどうかしたの? 」

「 …… 何か、複雑な気持ちなんだ。よくわからないけど 」

田の前にいるザーランドがランスを構える。

俺が乗っているKMFもサザーランドだ。

違うのは構える武器がないことだ。

「じつやい、銃弾が底を吸きたようだな」

相手は勝ちを確信したのか、どこか余裕を感じる口振りだ。

「悪いな、今回は俺の勝ちだ！」

そう言って一気に距離を詰めると相手はランスで「クピット」がけて思いつきり突いてくる。

俺はそのまま突きをしゃがんで躱すとスタントンファーマーで足を殴る。

「勝利を確信するのは」

そのままの勢いでバランスを崩した相手の「クピット」をスタントンファーマーで思いつきり殴った。

「まだ速いと思しますよ」

いい終わると同時に相手の撃破判定が出た。

「勝者、ダーナ・クルショフスキーノ！」

俺がシニコレーターから出ると教官がそう言つて近づいてきた。

「流石は、ダーナ、いい試合だった

「ありがとうございます」

いい試合？

あんな詰まらない相手との何処がいい試合だつたんだ。

「へつそ～～！ 今度こそダーナに勝てると思つてたのにーーー。」

「残念でしたね」

教官は向かいにあるシニコーラーから出てきた相手にも同様のセリフを吐いた。

はあ、早く姉さんの傍にいきたい。

ゆつくつと歩きだしながら、たつた一人の家族であり、たつた一人の姉のことを考える。

……モニカ姉さん

「ダーナ、お前にお密さんだぞ」

部屋を出ようとした俺を先ほどとは違う教官が呼び止めた。

お密さん……もしかして！？

「応接間で待たせてるから……」

「ありがとうございますーーー！」

俺は頭を下げて急いで応接間に向かった。

「ダーナ」

「モニカ姉さん！」

応接間にいると真っ先に目に入つたのは俺の最愛の姉だった。

「こんな時間にどうかしたの……いや、それよりも言いたいことがあるんだった」

モニカ姉さんは首を傾げる。

「ラウンズ就任おめでとう」

ナイトオブラウンズ

姉さんはこの間、ナイトオブラウンズの1人、ナイトオブトウエルブに就任したのだ。

自慢の姉だ。

「もう、この間も聞きましたよ」

「2人っきりの時に言いたかつたんだよ」

ラウンズの就任の時にちょっとしたパーティーがあり、弟である俺ももちろんパーティーに参加した。

その時にも祝つたが、俺としては2人っきりで祝いたい。

「ありがとう、ダーナ」

優しく俺の頭を撫でながら言うモーク姉さん。

「でもこれで、姉さんを守る騎士になるには難しくなったよ」

姉さんの親衛隊になるか、それとも

「私がダーナ守るから、ダーナは私を守らなくともいいですからね。

私はダーナのお姉ちゃんなんだから当然です。

ですから、ダーナは何かあつたら私に頼るんですよ

……嫌だね

俺は姉さんを守れるぐらい強くなる。

たつた一人の家族を守りたい

姉弟で話していると扉がノックされる。

それを聞き、モーク姉さんは慌てて俺の頭を撫でるのを止める。

……もっと撫でてほしかったかな

「失礼します」

そう言つて入つてきたのは、『』ブリタニア士官学校の理事長だ。

こんな間近で初めて見たな。

「理事長……？ 姉弟水入らずの時に何か用ですか

詰まらない用なら……

「そう睨むな、ダーナ・クルシェフスキ。 これはお前からしても、とても興味深い話のはずだ」

興味深い話？

興味深いな。

「ダーナ、お前は我らがブリタニア士官学校は何年かに一度、本國各地にある三ヶ所の士官学校から、各一人づつ学校から有望な人材を推薦するのを知つてるか？」

「知りません」

そんな話は今初めて知つた。

つか、それを今、俺に言つてことは

「そうか、この学校はダーナ、お前を推薦しようかと思つてゐる

「ありがとうございます」

流石は実力主義ブリタニア、強ければ強いほどトントン拍子に話が進む。

「よかつたですね、ダーナ！」

姉さんも嬉しそうに笑みを浮かべながら俺を褒める。

でも

理事長は違う

理事長は重苦しい顔をして言つた

「ダーナ・クルシェフスキー、君はEU攻略に参加してもいい

えつ？

EU……攻略？

訓練じゃなくて……いきなり、実戦……？

実力主義ブリタニア

俺はこの国を少し舐めていたのかもしねない。

この国は強い者ならば即実戦に使う。

恐ろしい国らしい

ダーナ・クルシェフスキ

まだ子供でありながら、ブリタニア士官学校に入り、度重なる飛び級を経て最小年卒業かと思われていた少年。

幸か不幸か

いや、不幸なのだ

今年は、そんなダーナが卒業する年であり、数年に一度ある実戦投入の年だ

この実戦投入は事実上、作戦が上手くいくための捨て駒

今まで生きて帰ってきたのは、いくつ数名

だが、この実戦投入から帰ってきた逸材は、即評価される

そう

ブリタニア皇帝直属の騎士であり帝国最強の12騎士

ナイトオブラウンズになるには、最も険しく、最も最短な道だ

偽りの弟編 1（後書き）

次回は皆大好きあの人登場！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1475ba/>

俺は僕で僕は

2012年1月5日23時49分発行